

氏名 芝田 正夫 (しばた まさお)

職名 教育学科 教授

最終学歴 京都大学大学院教育学研究科修士課程

学位 教育学修士

論文題目：「イギリス公共図書館法の成立とエワート報告」



主な職歴 1979年 関西学院大学社会学部助手
1980年 関西学院大学社会学部専任講師
1983年 関西学院大学社会学部助教授
1992年 関西学院大学社会学部教授
2009年 関西学院大学教育学部教授（現在に至る）
関西学院大学教育学部長（2013年3月まで）

その他 1991年 スターリング大学（英国）客員研究員（1992年3月まで）
2014年 日本出版学会会長（2016年5月まで）

専門分野 メディア史、出版学、メディアと教育

主な著書・論文等

1. 『新聞の社会史—イギリス初期新聞史研究—』（単著）（晃洋書房、2000）
2. 『現代の公共図書館・半世紀の歩み』（分担執筆）是枝英子ほか編（日本図書館協会、1995）
3. 『メディア用語を学ぶ人のために』（分担執筆）渡辺武達・山口功二編（世界思想社、2000）
4. 『白書出版産業 2010』（分担執筆）日本出版学会編（文化通信社、2010）
5. 「図書館の理念と“疎外された人々”の問題」（単著）（『図書館界』34巻1号、1982）
6. 「子どもとメディア—問題の所在」（単著）（『総研ジャーナル』91号、2008）
7. 「『知識への課税』回避の歴史—イギリス・スタンプ税の場合」（単著）（『中央公論』2013年12月号）
8. 「出版文化の総合的な研究をめざして」（単著）（『出版ニュース』2014年7月中旬号）

教育学部開設に携わって

芝田正夫

関西学院で、38年間もの長い間、お世話になりました。1979年に社会学部の助手となり、2008年まで社会学部でメディア史などマス・コミュニケーション関係の講義を担当しました。

その後、縁あって新設の教育学部に異動しました。

教育学部の開設

2006年から教育学部の開設準備の業務を担当し、2009年に新設の教育学部に移りました。聖和大学と関西学院との合併のなかでの準備でしたので、聖和大学の教職員の方々と共同作業を進めました。聖和大学の長い伝統を基礎に関学の教育学部をつくることになったからです。認可のことなどで、さまざまな課題に直面しましたが、なんとか無事に開設に至ることができました。「学校法人の経営統合は全国初で、モデルケースとして全国の私立大学にも大きな影響を与えそうだ」（『読売新聞』2006年1月18日）とされた法人合併にともなう新学部設置だったため、緊張のなかでの作業でした。

新学部設置の仕事を多くの方と協力して進めることができたことは、私の大きな喜びです。

文部科学省への申請、新たな招聘した教員の方の割愛、カリキュラムの作成、1期生の入試の実施など枚挙にいとまがない作業に、開設準備に関係する教職員で取り組みました。その際に、開設後に学部教育の大きな特色となった実習の方向性も決めて、実施案をつくり、委員で分担して近隣の教育委員会に依頼にかけたものです。

教育学部も、学科再編を経て、2017年度は9年目を迎えます。この間、多くの卒業生を教育・保育現場の送り出すことができました。

研究について

大学では図書館学を専攻し、主に英国の公共図書館の歴史を調べていたのですが、その延長で英国のメディアの歴史、とくに新聞の歴史を研究領域にしてきました。

図書館学からはじまり、メディア史、メディアと教育と、研究領域を模索してきました。どの領域も

十分な成果が出せず忸怩たる思いです。ただ、英国新聞の歴史については、在外研究の機会に収集した資料などを活用し、僅かではありますが、新しい知見を紹介できたと思っています。

大学生のときから指導を受けた小倉親雄先生、津金澤聰廣先生からは、なによりも実証的な研究が大切なことをお教えいただいたと思います。英国新聞史研究においても、1次資料の収集に努めてきました。ただ、資料類の発掘に時間をとり、それらを活用した研究が進まなかったことが悔やまれます。

教育学部のこれから

学部や研究科の将来は、私より若いスタッフの方が担われていくわけで、私がいろいろお話しするのは不適當かともおもいますが、すこしばかり私見を述べたいと思います。

幼児教育コース、初等教育コースを持つ限り、「教員養成を主たる目的とする」という旗印は保持しながら、新しい社会の変化に対応していく必要があるでしょう。以前の大学は、「大学のなかの空気」が学生を育てる、といった面があり、学生の自主性を大切にしてきたのですが、今日においては、学生に目的が明確で具体的なプログラムを提供し、見える形で資質と能力を身につけさせて、社会に送り出すことが求められています。また、そうした教育活動を支える研究活動の充実も欠かせません。教育学部においても、こうしたプログラムをカリキュラムの内と外とで用意することが必要だと思います。また、その前提として、どのような人間を育てるのかを明確にし、それを学部内の共通理解にしておくことも不可欠でしょう。

さらに、こうした学部の性格から、大学外の人々や組織との連携協力が欠かせないでしょう。卒業生の協力も得て、多くの人との協働で学生を育ててほしいと願っています。

教育学部に移って8年、本当に多くの方のお世話になりました。心より感謝するとともに、これからの学部と研究科の一層の発展を祈るのみです。